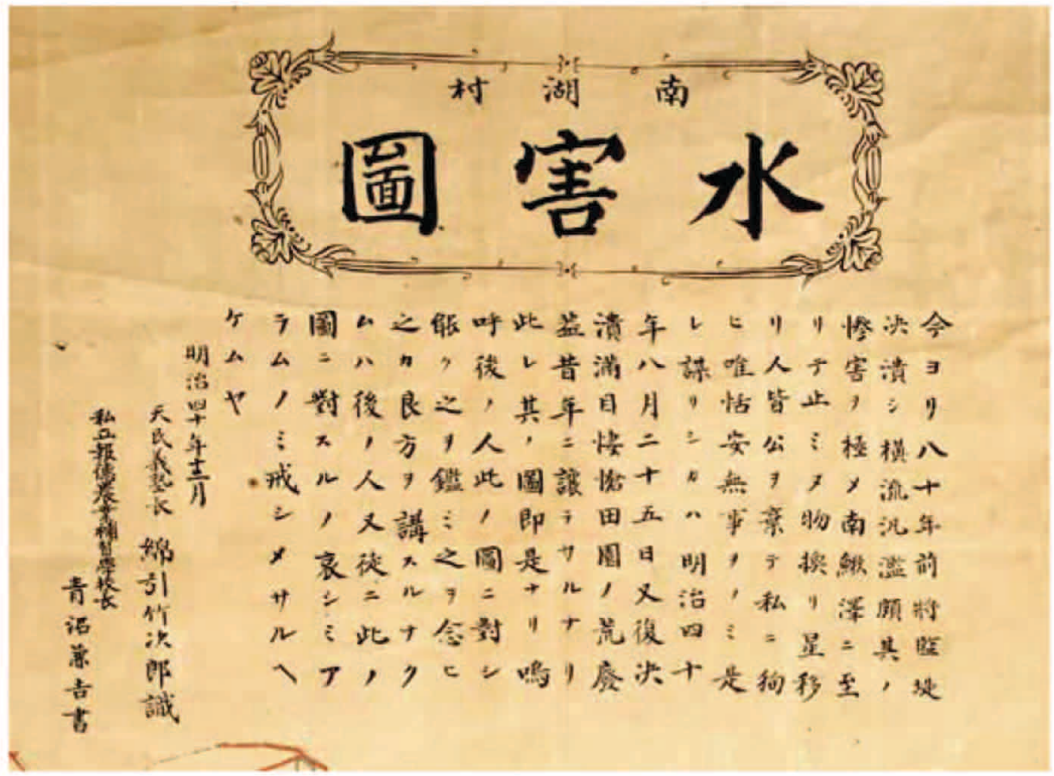
干ばつと水害を超えて③

明治40年（1907）の大水害と南湖村水害図

明治40年8月に起きた洪水は、県内の死者233人、被災家屋約16,300戸を超え、南アルプス市内にも大きな被害をもたらしました。今月号は、近代史上最大とされる明治40年の水害とその水害を今に伝える南湖村水害図をご紹介します。



明治40年南湖村水害図　詞書き
南湖村水害図作成の経緯と後世の人々へのメッセージが水害図（P13右上の写真）の上段に書かれている。

8月22日から降り続いた雨は滝に例えられるほどの豪雨で、釜無川の上高砂二番堤防、下高砂六番堤防の決壊を引き起こし、洪水流は今諏訪を下って開国橋を流失させました。さらに下流の鏡中条村では25日午前8時頃、釜無川治水の要である将監堤（しょうげんてい）が決壊し、氾濫した濁流が鏡中条村から三恵村、藤田村、南湖村を通り抜け、広大な面積の田畑が押し流されました。甲斐新聞はこの洪水を「今回の出水は実に近古未曾有（きんこみぞう）と云うべく」（甲斐新聞　明治40年8月31日）と表現しています。洪水によって水や食料が不足し、家々が奪われ、さらに生活の糧である田畑を失い絶望の淵に追いやられた状況にありながらも、そこから先人たちは復興をめざしたのです。

復旧作業が進められていた12月、南湖村報徳社で、この被害を記録した水害図が作成されました。水害図には決壊した堤防や田畑の流失地、浸水家屋や流失家屋が図化され、人や家屋、土地、農作物の被害状況も詳細に記録されています。この図が作られた経緯は、水害図の詞書（ことばが）きに記されています。（以下、要訳）

「今から80年前、将監堤が決壊して（釜無川が）氾濫しその惨害を極め、南鰍沢に至って止まった。時が移りゆく中で、人々は周りの人々と助け合うよりも自らの安全ばかりを追い求めるようになったが、明治40年8月25日、再び（将監堤が）決壊し、田園の荒廃は昔よりさらにひどい状況となった。この図がその時の状況である。どうか後世の人々よ、この図を鑑みて、よく考え、よい方策を講じてください。それをしなければ、この図を見て、ただいたずらに哀しむだけで、戒めとはならないでしょう」

これは、地域の人々に請われ天民義塾と呼ばれる私塾を開き、郷土に多くの人材を育てた水戸出身の綿引竹次郎の言葉です。その言葉は、百年以上後に生きる私たちにも治水・防災の大切さを訴えかけ続けています。

明治40年水害後の将監堤付近
右奥に見える土手が将監堤。洪水により寸断されている状況がわかる。

明治40年南湖村水害図（報徳社蔵）

綿引竹次郎（『匏水（ほうすい）詩集』より）

ふるさと文化伝承館で開催中の「堤の原風景」展で、南湖村水害図の写真パネルを8月31日まで展示しています。ぜひご覧ください。

註
鏡中条村：下今井、鏡中条　藤田村：藤田、浅原　南湖村：田島、西南湖、東南湖、和泉、高田新田